

日韓合同で開催された、 日本質量分析学会2002年度同位体比部会

長尾敬介*・角野浩史（地殻化学実験施設、* 同位体比部会長）

昨年の田中耕一氏のノーベル賞受賞で、質量分析という言葉が一般に知られるようになった。日本質量分析学会の会員である田中氏の受賞対象になった論文は、この学会誌と学会が主催した日中合同シンポジウムに発表されたものである。この日本質量分析学会の研究活動を支える部会の一つである同位体比部会は、「同位体比の精密測定に関する研究会」として1965年から続いている。主要な目的は、互いの情報を交換して元素の同位体比を精密に測定する技術水準をハード・ソフト両面で向上させ、同位体比測定に関わる分野のレベルアップを目指すことである。最近の話題は同位体測定法、同位体比変動の基礎過程、同位体地球惑星科学、環境問題など多岐にわたっている。100名程度の参加者が2泊3日泊まり込みでおこなうこの部会は、その半数近くを学生がしめており、広い年齢層の交流の場として毎年の参加を楽しみにしている人が多い。

昨年は、部会始まって以来初めて海外で、日韓合同の「2002 Japan-Korea Joint Meeting of Isotope-Ratio Mass Spectrometry, The Mass Spectrometry Society of Japan」として、韓国済州島西帰浦KALホテルを会場に、11月

20日（水）から22日（金）まで開催した。参加者は、日本側52名（一般37名、学生15名）および同家族7名、韓国側12名と盛況であった。韓国側参加者の中には、韓国地球科学鉱物資源研究所で研究を続けられている東京大学名誉教授・増田彰正先生や日本で学位を取られた研究者もあり、日本側参加者の中には、現在日本に滞在している韓国やスロベニア出身者、ブラジルの大学から参加した日本人研究者もいるなど多彩であった。

研究発表は、一人当たり30分間の口頭発表16件（うち学生3名）と27件のポスター発表（うち学生12名）があり、全て英語でおこなった。ポスター発表は二日に分けて、一人2分間の口頭発表と2時間のコアタイムを設定して十分な議論の時間を確保した。特別講演として東京工業大学・平田岳史氏に、「Inductively Coupled Plasma-Mass Spectrometry (ICP-MS)」という題名で、最近各方面で注目されている誘導結合プラズマ質量分析の基礎から未来像を含めた最先端の応用例を話していただいた。時間に縛られず夜中まで続いた自由な討論や西帰浦市街のレストランでの焼き肉パーティーなど、和気あいの雰囲気に、次の

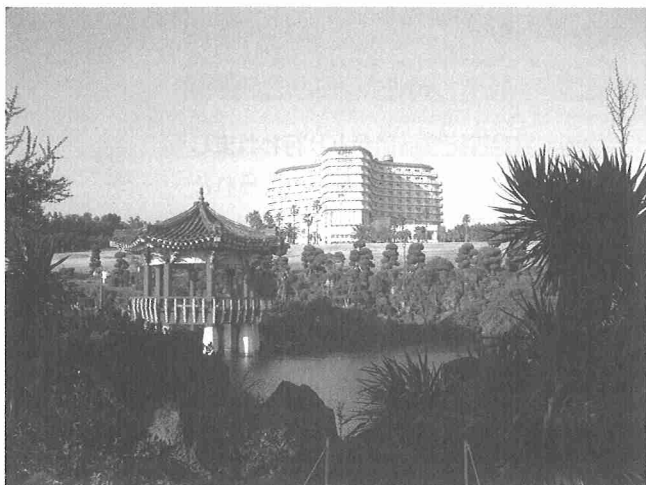
合同会議を是非ソウル大学で開催したいとの提案も韓国側参加者から出された。同位体比部会の実体を全く知らなかった韓国側研究者に、部会の有用性を認識してもらったという意味でも有意義な合同会議であった。

濟州島は「東洋のハワイ」とも呼ばれる韓国最南端に浮かぶ火山島で、中央に韓国最高峰の漢拏山(1950m)がそびえている。世界最長を誇る溶岩洞窟である万丈窟(マンジャングル)に代表される様な、溶岩が作った興味深い地形に富み、更に成因論的にも謎が多い火山学上重要な島である。会議翌日には30名の参加者で島内西部の巡検を行い、濟州島の地質と風景を楽しんだ。

この日韓合同会議は、東京大学地質学教室に留学生として在籍し、1992年博士の学位を取得された韓

国海洋研究所の李鐘益(Lee Jong Ik)氏が、共同研究のため来日されていた一昨年秋に計画したものである。今回の合同会議の成功は、ホテルとの交渉や巡検の手配など全ての面にわたる氏の協力に依るところが大である。また、濟州国立大学の尹正守(Youn Jeung Su)教授には、心温まるサポートをしていただいた。会議には参加されなかったが、多くの旧知の韓国側研究者の支援があったことも記して感謝する。

同位体比部会のプログラムや写真及び会議のアブストラクトなどは、質量分析学会ホームページ <http://www.mssj.jp/index-jp.html> に掲載している。



会場のKALホテル



口頭発表